社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年11月号

［10面］

S・I・Aが分別運動展開

ペットボトル・キャップが子供の命を救う

▲エコキャップで満杯になった回収ックス。左が北村さん

ペットボトルのキャップを回収し、世界の子供たちにワクチンを贈る活動を、国際協力サークルの「S・I・A」（安藤徳明代表・経済2）が行っている。

4月から分別活動を始め、9月、生田キャンパス10号館入り口に回収ボックスを設置。ボックスは現在3基に増え、キャップは11月10日現在、約9000個が回収された。

この運動をサークル活動に取り入れたメンバーの北村静さん（経済2）は「キャップは、捨てればただのごみ。分別すればエコキャップとして資源になり、発展途上国の子供の命を救う。小さな積み重ねが大きな結果になります」と、分別の徹底を呼びかける。

「キャップを分別していた母から、どう利用されるのか調べてみてと促されたのがきっかけ」と北村さん。エコキャップ運動で全国に約600の支援団体を持つボランティアグループ「MATE」（横浜市）の代表から活動の仕組みを聞いた。

同団体は、キャップをリサイクル業者に売却（建築用のコンクリート型枠用合板代替品「エコプライ」に活用）。売上金はNPOを通じポリオワクチンとして途上国に贈る。キャップの売却益は800個で20円。それが1人分のワクチン代になる。

ごみになれば有害なCO2が排出されるが、その心配もなくなる。リサイクル品は半永久的に活用される…などエコキャップの利点は多い。

北村さんは、ペットボトルの需要が多いキャンパス内で活動を展開しようと行動に移した。

回収ボックスは瞬く間にいっぱいになった。独自に作った回収箱をバイトの店先に置いてもらったメンバーもいる。鳳祭ではごみ箱4種を設け、鳳祭実行委員とともに「ごみ分別ナビゲーション」を展開＝8・9面に写真。3日間で約1000個集まった。

北村さんは「同じ目線で学生に呼びかけることでごみ分別への意識を高めたい」と話す。

※※※※※※※※※※※※※※※※

「S・I・A」は、フェア・トレード商品のチョコレートを生田キャンパス購買会に出荷する運動も行っている。フェア・トレード運動は、発展途上国の原料や製品を適正な価格で取り引きし、生産者や労働者の自立、生活改善を目指す。

メンバーの原康晴さん（経済2）は「7種あり、チョコレート本来の味がします」と紹介。「学内にフェア・トレードの意義を広めたい」と随時、新製品も置く予定だ。

▲フェア・トレードのチョコは生田キャンパス購買会で

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年11月号

［10面］

文学部公開講座「身体という迷宮」

文学を通して健康を考える

統一テーマを「『身体という迷宮』―文学を通して健康を考える」とした第41回「文学部公開講座」が10月20日、生田キャンパスで開かれ、約70人が聴講した。

最初に久木留毅准教授が「身体の限界を探る―トップアスリートのコンディショニングから健康を考える―」と題し、自分に合った健康法をアスリートから学ぶ大切さを説いた。次に、貫成人教授が「健康という病、病という健康―世紀末ヨーロッパにおける身体―」、石塚久郎准教授がイギリスの歴史と文化の専門から「凡庸な病の肖像―カーライルの胃弱人生―」と題して講演した。

石塚久郎准教授

貫成人教授

久木留毅准教授

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版
2007年11月号
［10面］

留学生スピーチコンテスト

9月に来日したばかり 徐康源さん（韓国）が1位

第1位と成なった徐さん

第8回専修大学留学生日本語スピーチコンテストが10月16日、生田キャンパスで開催された。1位は、焼肉店での日本人と韓国人の食文化の違いを、滑らかな日本語で語った徐康源さん（韓国・文学部特別聴講生）が獲得した。

出場者10人は、日本での留学生活で気づいた異文化のとまどいや発見、感動を、エピソードを交えて披露。なかには失恋の痛手を切々と訴えた留学生もおり、会場がしーんと静まり返る場面もあった。

接戦を制しトップになった徐さんは、檀国大学から交換留学生として9月に来日したばかり。昨年、日本の語学学校留学中に焼肉店でアルバイトをし、日本人の焼肉の食べ方をつぶさに観察。「韓国では、グループみんなの分も一挙に肉を焼くが、日本人は一人ひとり自分の分だけ焼いて食べる。大勢でわいわい食べるのが当たり前の韓国人に比べ、一人で店に入り漫画本を片手に黙々と肉を焼く日本人にはびっくりした」と両国の国民性をユーモラスに語り、盛んな拍手を浴びた。

表彰式後の懇親会では大林守国際交流センター長から一人ひとりに賞状、商品が手渡された。

2位以下の入賞者は次の通り＝敬称略。

▽2位＝李嘉嬉（韓国・ネットワーク情報学部特別聴講生）
▽3位＝李慧美（韓国・文学部特別聴講生）
▽特別賞＝マーンサクン・チャンヤー（タイ・文学研究科研究生）／朱曄（中国・商3）
▽入賞＝李熙妍（韓国・商1）／孫志雄（韓国・経営1）／李ユナ（韓国・文学部特別聴講生）／李金蘭（中国・大学院商修1）／カオタイン・リー（ベトナム・文学部特別聴講生）

▽司会＝玄聖花（中国・大学院経済博2）
▽ゲストスピーカー＝専修大学北海道短期大学留学生スピーチコンテストで優勝の賈雷（みどりの総合科学1）

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年11月号

［10面］

経済・永江ゼミ生

ディベートリーグで3位

気持ちを一つに

経済学部の永江雅和ゼミでは、毎年他大学の経済・経営系ゼミとディベートリーグを開催し、3年次生が参加している。7大学が参加した今年の「第5回経済史・経営史ディベートリーグ」は10月14日、神田キャンパスで行われ、10人ずつの2チームが参加。1勝1分けで同率首位に3校が並んだが、得点差で3位となった。永江准教授は、「過去最高の結果を出すことができた。体育会並みの厳しさで鍛えてきたが、よく頑張ってくれた」と教え子たちの努力をたたえた。

▲本学のMVPに選ばれた小笠原さん（右）

▲鋭い質問をする小川さん（左）と早川さん

「ポストバブル期、金融機関への公的資金投入は日本経済にとって必要であったか」のテーマと対戦校が5月に決まってから、さまざまなデータを集め、どんな質問にも対応できるよう準備を重ねたが、夏期休暇中のオープン戦でまさかの2敗。「先生の悔しがる様子に『これではいけない』と合宿で気合を入れ直しました」と勝利チームの最終弁論を担当した村上光さん。大会前日には生田研修館に泊まり込み、最後の仕上げをして臨んだ。立論担当の早川枝里さんは、「わかりやすく、ジャッジに訴えかけるような発表を心がけました」と話し、「攻めのエース」とみんなが認める小川寛明さんは、「発言するうちに熱くなりすぎる点を指摘されていたので、抑えるように意識して質問しました」と仲間に感謝する。

▲10人のチームワークで臨む

惜しくも引き分けとなったが、各大学から1人ずつ選ばれるMVPとなった小笠原弓佳さんは「経営学のゼミが相手で論点がかみ合わず、こちらのペースに乗せられなかったことが反省点です」と悔しがる。最終弁論の荻原元希さんは、「10人という大人数の中で、気持ちを一つにしようと心がけていました」と4カ月を振り返った。立論の森諭史さんは、「今回の経験で応用力がついたと思う。就職活動でも自信をもって自己PRができそうです」と話してくれた。

レジュメの構成や発表の仕方など、得たものを伝え、「来年こそ優勝を」と後輩に夢を託している。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年11月号

［10面］

学校教育ボランティア

クラブ活動支援やティーチングアシスタント 10人が申し込み

▲塚田日本女子大客員教授の説明を熱心に聞く学生たち（10/13）

多摩区・3大学連携事業の一環として、日本女子大学が区内の小中学校を対象に行っている「学校教育ボランティア」事業に本学の学生も参加が可能となり、10人の申し込みがあった。

事前授業として10月13日には、小学校長として豊富な経験を持つ同大・人間社会学部の塚田庸子客員教授が、学校教育の現場やアシスタントティーチャーとして求められる資質と能力、活動内容について説明を行った。

同20日には、本学経済学部の角田真紀子講師（スクールカウンセリング、発達・学習心理学）が、特別支援教育について講義。自身の経験から「少しの手助けで、学校生活が楽しく、うまくいくようになる」という学校教育ボランティアの役割を話した。

樋口絢子さん（経済3）は、「2年次の海外特別研修でラオスの小学校を見学してきました。実際の学校教育現場を見ることの大切さを感じ、志願しました」。宮澤亜里沙さん（文3）は、「さまざまな学校教育の問題解決の力になれれば」と応募の動機を話してくれた。

応募者は特別支援、クラブ活動支援などの希望を申告し、各学校との面接を経て、活動をスタートさせる。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.